## 「子どもの感性を磨く」　美しいと感じる心があるから美しい！

子どもたちは、自然の美しさ、不思議さに気付く鋭い感性を持っている。残念なことに、私たち大人の多くは成長するにつれて、この感性を鈍らせてしまうと言う。また、生まれつき備わっている子どもの感性を保ち続けるには、自然の美しさ、不思議さを一緒に見つけ、その感動をともに味わう大人がそばにいることが必要だとも言われている。こうしたことから、子どもたちには学校の学習で、家庭や地域での活動で本物の自然に触れ、そこから多くのことを感じてほしいと思う。私たちにできることは、子どもたちのそばに寄り添い、一緒に感動すること、また、そうしたことができる環境をつくることと考える。

さて、私の勤務する岡崎市では、「岡崎市少年自然の家」主催となり、毎年、父の日を前にした土曜日の午前に一般の家庭を対象にした自然観察会「初夏の虫ウォッチング」を開催している。毎年、30 人を超える子どもたちとその家族が参加する。私も学校 5 日制が始まるとともに、トンボを中心とした標記の自然観察会のお手伝いをしている。

この観察会では、できるだけ多くのトンボを実際に採集し、手に取って観察することにしている。捕まえたトンボをその腹部持って網から子どもたちが引き出す時、力強く羽ばたく力に「いのちの不思議さ」を実感する。生きているときにだけ輝く深いブルーの複眼を目にすると、「きれいだ。どうしてこんな色に」と歓声を上げる。こうした自然の対象に対して、子どもたちが見せる反応については、「美しいものがあるから美しいのではなく、美しいと感じる心、つまり感性があるから美しい」のだと観察会を開く度に思う。

生きものに限ってではあるが、採ったり、触ったりした経験が少なく、内心怖い、苦手だと思っている教師は少なくないようだ。こうした教師の中には、生きものを教える時に、単なる説明で終わってしまうことも多いのではないかと危惧する。生きものを言葉の説明で済ませたら、失礼ながら文字の読み取りの授業と何ら変わらない。生きもの好きの親から生きもの好きの子どもが生まれるというように、教師の態度や姿勢が知らず識らずに子どもに移っていくこともあるのではないだろうか。ぜひ、本物を前にして、子どもとそっと寄り添い、子どもとともに、感性を磨く教師（親）でありたいと思う。　＜ 元岡崎市立矢作北中学校長　　鈴木 栄二 ＞